

生物研究

第 XI 卷 第 1·2 号

1967

THE LIFE STUDY

Vol. XI, Nos. 1-2

June 27, 1967

FUKUI, JAPAN

台 湾 採 蜂 記

常 木 勝 次

Wasp Hunting Excursion to Formosa

By K. TSUNEKI

日本で一通り虫を調べた人なら、次に誰でも台湾へ行ってみたいと考えるようになるものである。これは蝶採集家について最も顕著だが、蜂でももちろん例外ではない。

ただ私の場合は、単に珍しいものを採集してみたいという物好きな動機からではなく、必要と問題解決という2つの理由からであった。必要というのは、このころの私はときどき南方の蜂の査定を依頼されるが、それをしっかりやるためには文献だけではだめで、どうしても自身南方の体験をもっていなければならないが、それを手取り早くもつには台湾へ行くのが一番だからである。第2の解決すべき問題というのは、九州大学の白水教授の採集品が提出したものである。白水博士は、人も知る著名な蝶学者だが、最近長期にわたる台湾での研究の合間に、いろいろな昆虫を広く採集され、その中の蜂(あなばち科等)を私の所へ送ってこられた。一般に専門外の人の採集品には、ろくなものがないのが通則であるが、白水さんはその例外者である。これは以前から白水さんの採品を見るたびにいつも感じていたことであるが、こんどの採品には私がむしろ驚かされるようなものが多かった。それは、有名な Sauter の台湾採集品を調べた Strand 博士の報告中にもないものが、ぞくぞくと出てきたからである。ただ、これは止むを得ないことではあるが、個体数が少ないことが、いろいろと問題を残した。少ない個体からは、その種が台湾で稀種なのか普通種なのか、山の種か平地の種か、島全体にいるのか限られた地域だけにいるのか、全くわからないのである。これを確かめるには、どうしても自分で行って自分の眼で調べるほかはない。幸いにも私は、ふだん体を鍛えているおかげで、同年輩の他の人より、はるかに健康である。この健康が許す間に早く行け、ということになって台湾採集行が実現することになった次第である。

採集に田塾正君が同行することになった。田塾君は台湾へ行くのはまだ早すぎるという感もないことはなかった。また採集に同じ対象を狙う人が同行することは元来タブーである。だが同君は採集品を全部私の研究に委ねることなので、それなら優秀な助手を得ることになるわけで、私も喜んで同君の同行を認めたのであった。台湾滞在中の同君の活躍はすばらしく、私の採集できなかつたものを同君が採ったり、とくに、個体数を多く集めることでは私より同君の方がはるかに勝っていた。そのほか同君はその朗らかな人柄と好男子の故もあって方々でなかなかもて、同行の私まで一層親切にされるという余得まであった(台北の宿の可愛い女中さんが、こっそり私に他有的有太太?などときいたほどだ)。

さて大阪発の飛行機は途中沖縄へ立寄るが、それでも3時間半の後には台北へ着く。時は昨年(1966)の7月1日であった。白水さんからの連絡があつて、同博士の知人で昆虫学者の張保信さんの出迎えをうけ、宿に案内された。翌日、台湾大学の易博士、陶氏などの格別の御力添えをうけて、日本の文部省・警察庁に当る台湾の役所へ、かねて申告しておいた甲種入山許可証を受領すべく出頭したが、結局これを得ることはできなかつた。何でも前年日本のアマチャー昆虫家についてスパイ容疑事件があり、それを理由に以後全面禁止ということになったのだそうである。このため出発前に、台湾で多年蜂の研究をされた南川博士、また台湾に住んでおられた教室の小野寺さんや、戦後台湾で何度も採集された前記白水さん、教室の卒業生の清水君(信大助教授)などを頼むして得た知識を元に作った予定の日程表は、完全にくつがえることとなった。結局我々は許される範囲内で、最大限の調査を行なうより外ないという情けない立場に立たされたのである。

そこで翌日から早速採集に取りかかり、以後60日間ネットをもって台湾の低山帯や平地を歩きまわったわけである。高い所へ行けたのは、観光コースになっている台湾横貫公路と阿里山だけであった。幸いにも私たちの行った年は8月になって南部が雨期に入らず、そのため、どこでも終日雨のため採集不能という日は

1日もなかった。雨のために多少採集を妨げられたのは台南県の関子嶺だけであった。このため、移動の日以外は実によく出歩いた。朝はたいいてい7時~8時のバスで出発し、夕立で追帰される以外は夕方まで働いた。夜(田塾君)と早朝(私)は採集品の針止めである。三角紙包みの標本より、現地で針止めた標本の方が研究には万事好都合である。だから私たちは2日間クレオソート詰めにした後、標本をほとんど全部(微小形以外)針止めにした。大顎を開かせたり、genitaliaを引出したり、はねや肢が後でじゃまにならぬように整理したり、とにかく研究用の標本に整備したわけである。終日歩きまわった後、休みもなしに宿での時間を使いつくす私達の働きぶりは、どこでも宿の人達を驚かせたようである。もしも私がふだん体を鍛えていなかったら、60に垂んとする年で60日間のこの強行は持続できなかったのではないかと思う。

私たちは台北の北方台地の陽明山(昔の草山であるが、台湾には他にも廬山などという中国大陸の著名な地名を新たにつけられたところがある。総統の郷愁のように思われる)を振出しに西から南へ向って出発、途中蝶の採集地で有名な埔里と阿里山へ寄り道した後南端に出てしばらくおり、転じて東岸へ出て北上した。台北へ8月22日ごろに戻ったが、ここで田塾君は学校の都合で私より一足早い飛行機で帰国し、私は10日ばかりの残りの日程を過ごすために再び埔里へ行った。このように長期の採集行だから、採集記を日程を追ってながながと綴るわけにはいかない。私の日記だけでも1冊のノートがいっぱいになったほどである。そこで以下には、主としてBaseとした地点ごとに、少し話してみることにする。

陽 明 山

前記のように、ここは台湾採集の第1歩を印したところで、7月3日張保信さんの案内で行ったのである。台北停車場からバスで1時間半くらい、バスは山を越すものや、いろいろあったが、中腹の駅で下車して早速採集にかかった。何しろ見るものすべてが珍しいので、やたらに採集した。出発するとすぐに出会った崖くずれの所で早くも赤脚のタイワンジガバチ、後腿の赤いコオロギバチを数頭とった。後者はこれまでに依頼された標本の中に何頭か見たことのある種 *Liris subtessellata* Sm. であるが、ここでは熱心にさがしたにもかかわらず、数頭しかとれなかった。それからは広い登り道の両側は林になっていて、蝶ではナガサキアゲハ・ベニモンアゲハ・タイワンフタオツバメをはじめ、大小のものが賑やかに飛来し、また体の腹側に金色に光るタイワンオオカメムシや、はでな色彩をもったチャイロエグリコガネのように、私達には珍しい虫もとれたが、蜂は余り多くなかった。樹幹には、奄美で対面ずみのキノボリトカゲがよく眼についた。このトカゲは周囲に合わせて体色を変える種で、台湾にはどこにも多いことを後で知ったが、初めてのことで田塾君は早速カラーに収めた。登って行くうちに道が開けて苗圃に出たが、ここにセグロアカアシアナバチがたくさん造巣していた。この種 (*Sphex haemorrhoidalis* F.) はアフリカからアジアまでと分布が広く多くの亜種がこれまでに記録されているが、台湾のものは朝鮮のものに比べて、明らかに翅が大変黄色いことが一目でわかる。ここには、数は少ないが、またキンモウアナバチ *S. flammitrichus* Strand も造巣していた。付近の人家を漁ってモンキジガバチ(日本のと同種であるが早は日本のものよりはるかに美しい)、ルリジガバチ、数種アシナガバチ類、ドロバチ類、青蜂類などをとった。ここには脚の赤いオオハヤバチがいるはずであるが、発見できなかった。更に進んだ所の流れの付近で、チツゼミや、きれいな色彩をしたカメムシ類、トンボ類などを採集した。

楊 梅

台北から汽車で1時間ばかり行ったところ。張保信さんの生家のあるところで、7月5日招かれて参上、夕刻までを付近の林で採集したのである。その小高い丘のふもとのサツマイモ畑や、台湾で初めて発見したノブドウなどで採集した。路傍にはマンテマの花が開き、カクコウアザミが咲き乱れていた。後者は日本では植木屋の店頭にみかける観賞植物で、たしか米大陸の原産と思っていたが、これが野草のように台湾の野原にある。この日は獲物が非常に多かった。サツマイモ畑では多種多数のコオロギバチ類をとり、ノブドウでは、ハラナガスズバチ・クロスジズバチ・キイロアナバチ・キンモウアナバチ・ハヤバチの1種・多種のアシナガバチ・ドロバチ(シリアカドロバチが非常に多い)・ミツバチ類がとれた。これらの中でハラ

ナガスズバチとキイロアナバチの合とは、ときどきしか来ないので、それを獲得するために、田塾君はすばらしい忍耐力を発揮した。この付近にはルリイロオムシヒキ *Microstylum oberthueri* Wulp. がよく姿をみせ、高い羽音をたてて、大きなセミが飛ぶように勇壮に飛びまわっては、灌木の梢や高く伸びた草の枝にとまる。このムシヒキは体長4cm くらいあり体も翅も黒色だが、翅は日光をはね返して青緑色に輝ききれいである。このアブは台湾には各地に普通だそうであるが、われわれは他の採集地では1度も出会わなかった。この付近にはまたハグロゼミも少なくなかった。翅が黒く腹部が燃えるような赤で、胸にも赤斑があり美しいセミであるが、行動は遅鈍で採集極めて容易である。台湾ではどこへ行って見かけるセミで、ときには群棲する。この不活潑なわけは体に有毒なカンタリジンを含んでいることに関係する。私は田塾君と別れてサツマイモ畑で採集していると、6人ばかりの若者がドヤドヤやって来て話しかけた。私の忘れ残っていた中国語と、中の1人の怪しげな英語とを中介にして理解したところによると、彼らは兄弟で近くの家に住んでいるが、家の庭に1本の花木があり、それに蜂がたくさん来ているから来ないかというのである。案内されて行ってみると、家は相当な農家であって、入った所に接客室があり、そこでまず熱い茶の接待をうけまた採集などそっちのけにして話しかけられた。一段落の時でもあるし、相手になってみると、彼らは9人兄弟で上3人はいま学校へ行っており、休みで帰っているのだそうである(台湾の家庭は子沢山で、9人や10人は珍しくなく、私の泊ったある家の主人は13人兄弟だと話していた)。そこへこの家の主婦が、重い荷をかついで帰って来た。この人は年令上日本語が達者なので気楽に話すことができた。この婦人の話によると、家には田や畑は割合多いが、子供の学費が大変で生活は決して楽ではなく、自分は豚を飼って副収入としており、いや豚の飼料をとって来たところだという。それは丘の上の方の部隊の残飯で、そこまではかなりの距離である。こんなに強い若者がたくさんいるのだから、子供たちをやったらよいではないかときいてみると、子供は休暇で帰っているところだからと、自分が彼らのために働らくことを当然のように思っている口ぶりである。日本でもこのような母親はよく見受けるが、素朴な母の愛はどこでも同じことを改めて感じた次第であった。

ついでに少し述べておくと、台湾では、この家のように母親が汗して働らき、子供がごろごろしているのは決して普通ではない。むしろどこでも出会うことは小さい子供も帰省中の学生も実によく働らくことである。いたいけな子供が大きな荷を負って歩いているのをみると、むしろかわいそうに思われるくらいである。前記私の泊めてもらった家の帰省中の大学生などは、朝早くから仕事に出て、他の普通の若者といっしょに重い荷をかついだり、整理したり、毎日大童になって働いていた。しかも変なプライドを少しも示すことなく、みんなといっしょに仲よく働いていたのには全く感心させられたものである。

さて話がそれたが、しばらく休んだ後、兄弟たちをうながして Bee のいる木へ案内してもらった。それは長く続いた棟の端の方の、中庭にあった1本の楊桃の巨木で、繁った梢からは多数の枝がたれ、その枝で包まれた内側に小さな桃色の花が無数に咲き、そこに多数のタイワンクマバチが群がっているのであった。網を貸せというので用意の予備網を取出して渡すと、3・4人が木に登り、上で蜂をとってはリレーして私の所へもどってくる。途中で逃げられることもあったが、瞬く間に20頭もとれた。このクマバチ *Xylocopa attenuata* Pérez は台湾には非常に多く、台湾人の呼ぶレンギョウ(日本のレンギョウとは全然違う花木で紫の花をつり下げ、生垣によく使われる)や河原に多い大形の黄花をつける 荳科植物には多数が集まっており、農家の垂木などにたくさん造巣しているのが見られる。このときにはまだ珍しいので彼らにたくさんとってもらって喜んだものである。中に1頭のムネアカクマバチ *X. rufipes* Fr. がいたが、これはその後もそうやたらとれる種類ではなかった。そばの家畜小屋にはセナガアナバチが無数にいて、木に登れぬ小さい弟妹たちが、私の採集に協力してくれた。壁をはっているのを、すばやく指で抑えるのである。

張さんの生家は塙と生垣に囲まれた広大な邸宅で、父君は楊梅中学の校長さんであるが、台湾の上級中学の校長さんの地位は、日本の田舎の国立大学の学長くらいに当たるように思われた。もっとも、これは張さんのお父さんの個人的声望によるものだったかも知れない。張さんの家で、同氏の可愛らしい2人のお嬢ち

ゃんから、タイワンオオゾウムシを頂いたのは、私たちには大変印象に残ることであった。この巨大な美しいゾウムシの幼虫は筍を食害し、成虫も竹やぶの付近にすみ、台湾ではこの甲虫を筍亀(スunker)と呼ぶそうである。張さんの所の生垣にまじる竹やぶで捜してみたが、その日には見つかることはできなかった。後に私はこのゾウムシの飛ぶのを竹崎の山でみたが、日本のカブトムシが飛ぶような姿で、しかも豪壮な羽音をたてる。

埔 里

埔里から山の方へバス停2つばかり行った付近の大小の川の河原で採集した。7月10日前後のことだ。台湾ではどこでも治水事業はほとんど行なわれておらず、川の暴れるのに委してある。このためふだんの小川も一たび増水すると所きらわず暴れまわり、沿岸の畑をおし流してしまふ。そのためどの河川でも、ふだんの流れの小さいのに比べて河原は非常に広大である。河川の暴逆に拍車をかけるものは山の乱伐であって、これはどこでも言えることだが東海岸とくにひどい。そこでは足羽川の半分くらいの流れを取りまく石河原は、幅4~6キロにも及ぶ。とにかくこちらの山裾から向うの山裾までが荒れ放題の石河原なのである。治水さえ行なわれれば広大な穀倉地帯になりうるものと惜しい感じがする。そういう荒れ河原の端の方の、畑に連なる所では農民達が個人で、あるいは部落単位で小さな土堤を築いているが、これは氾濫に対してはほとんど無力に等しいもので、全く気の毒に思われた。

埔里付近の河原でも同様のことが見られたが、土はもちろん砂もろくないような荒れ河原にうねを作り、さつまいもが植えてあるのには、ことに心を打たれた。だがそういう河原は蜂の研究者には、それが少し古くなり雑草が生えだすところになると、すてきな実験場になる。埔里付近の河原でも、そんなところがいくらかでもあり、タイワンジガバチが盛んに造巣しており、ララヤリスが活躍していた。一つの古い荒地に作られたサツマイモ畑で、私は多数のコオロギバチのなかまをとったが、その中に相当数のロウケラトリが入っていたことは愉快だった。この種は日本のクロケラトリ(台湾にもおる)に似ているが後脚が赤い。また特筆すべきことは、この畑で2頭の *Alysson* を網に入れたことである。日本にもいる *A. pertheesi* Gorski に似た蜂であるが別種である。この属はインド・ヒリッピン・台湾とも未記録である。田塾君は翌日これを更にたくさん採るべく出かけて頑張ったが、ついにその後は1頭もとれなかった。この辺りにタイワンハナダカバチが前年大量に発生したらしく、埔里の木生昆虫採集社の余清金氏からその話をきき、またその含標本多数の寄贈をうけたので、付近をずいぶん捜したが、これは影も形も見えなかった。

埔里の町はずれの農学校(昔の農神の社のあったところ)付近の笹むらの大きな葉に、ジガバチモドキをはじめとして、いろいろな蜂がしきりにくることを田塾君が見つかり、ここを2人で交互に訪れて、しまいに1頭も来なくなるくらいまで採りつくしたが、ジガバチモドキは獲物の数も多く、腹部のほとんど全体が赤い珍奇な *gracilescens* や *formosicola*, *obsonator* (これまで *hyperorientale* として知られていた) などがとれ、また台湾にも数少ない *melanocorne*, *puliense* (新種) などとれた。

また別のイモ畑のあぜに生えた、ハナウドに似た植物の、白い花に蜂が次々に飛来するので、ここも2人で交互に採集してハナナガスズバチ・クロスジズバチ・シリアカドロバチ・コクロドロバチ・モンキジガバチ・キイロアナバチ・オオセイボウ・キンイロコオロギバチ(これはイモ畑)・フタホシアリバチ(オオアリバチ?) などを多数とり、ときどきはツチスガリの小形種もとれた。

田塾君は付近の鯉魚窟へ出かけて、実にたくさんエンモンバチをとって来た。このハチ *Stigmaeus iwatai* Tsuneki は霧社の山地でも路傍のアカメガシワの葉にいくらかでも飛来し、その気にさえなれば数百匹を採ることも可能なくらいいて、これまで私に依頼された南方地域の標本の中に1頭か2頭しか見出せず、非常に稀種と思っていたのがア呆らしく思われたほどであった。

なお埔里の町はずれの農家の壁には小さなドロバチがたくさん棲んでいて、その入口から細い小さい煙突をつり下げていたし、その付近には大小の青蜂がしきりにおとずれていた。台湾には青蜂は多く、私たちはどこでもこれを一つの目標にしたため、2人の採集品を合せると800頭をはるかに突破するくらいであった。

奄美でもそうだったが、やはり自分で行かなければだめだという感が深かった。

本部溪という谷は今年から解放されたので、私たちは何度もそこへ行った。非常に蝶の多い谷で、台湾の子供が採集人になって盛んにとっている (台湾では蝶は輸出品の1つでどこでも子供達が採集人になっている)。彼らは谷のあちこちに誘引所 (砂上に網と同大または以下の凹みをつくり、ここへ不要な蝶の翅や体をばらばらにまいておく) を作り、集まった蝶をとるのである。初めは網をもった私を敵視したが、そのうち話し合っただけで私が蝶を探らずに蜂を欲しがっていることを知り、すぐ仲良しになった。とくに2人の女の子とは蝶と蜂の交換をくり返した。この谷の河原には頭楯の黒いハナダカバチモドキ (私はスナハキバチと呼びたい) *Bembecinus tridens* がいたし、その河原のあちこちに生えた柳の木にアブラムシが大量に発生していて、その甘露を求めているいろいろな銀口蜂・ジガバチモドキ・コオロギバチ・マエダテバチ・プセンバチ・ベツコウバチ・アシナガバチ・青蜂類が次々に飛来した。ここで私はイラガセイボウ多数をとったが、この青蜂をイラガの繭以外から、野外で直接採集したのは私でも初めてである。また河岸の竹 (筍用) の葉に銀口やリュウキュウコオロギバチ・ジガバチモドキ・プセンなどがときどき来るので、埔里へ2度目に行ったときには、砂糖水とアルコールの混液を葉にふりかけ、ハバチの大形種 (7・8月には台湾にはハバチは少なく、いるのもみな小形種ばかりである) やマダラカギバラバチ (台湾未記録?) 数頭をはじめ、前記したような蜂やその他ベッコウ・ヒメバチなど珍品多数を得たのである。

高地の蜂

初めにのべたように、高い所へ行けたのは横貫公路と阿里山だけである。それも横貫公路は時間の制限で完走することはできないので、公路の枝道の1つの露社から翠峯へ2度行っただけである。翠峯は2500mばかり路傍にウドの花が満開で、見渡すと枯木も多く、他にヒヨドリバナやハナウド様の植物 (埔里ではたくさん蜂が来た) も群生し、いかにもギングチがいそうな所で、初めて行ったときには勇躍して採集にかかったものだが、さて網を構えてみても蜂はさっぱり来ない。雲がかかるまでの数時間 (高地はいつも午後には夕立雲が発生する) を次々とウドを訪れてみたが、とれたのはシロウズギングチ♀2頭と、*Ablepharipus* sp. の♂1頭だけ、2度目のときも、ほとんど同様な獲物だった。白水さんは翠峯の下の松崗で6月にいろいろな蜂をとっているのので、一度は翠峯から松崗まで歩いてみたのだが、いるのは大きなアザミの花に群がるマルハナバチ2種ばかり、全くがっかりさせたものである。これは白水さんは甲種の入山許可証を手に入れて、どこでも自由に歩けたのに対し、私は自動車道から55m以上入ってはいけないという、きつい制限をうけていたためかも知れない。

しかし更に下った霧社に近い所では自動車道の傍らの小灌木やイノコズチの花で、シナツチスガリや、腹部の赤い *Entomognathus* (♂は腹部は黒く黄斑がある) 前記エンモンバチなどをたくさんとり、路上でタイワンホソジガバチ (*Anmophila formosana* n. sp.) などとれた。霧社は既に中山帯で、8月末に行ったときには、ノブドウの花が多く、そこで多数のタイワンハヤバチの♂やセグロアカシアナバチなどもとれたものである。

阿里山も同じように蜂が少なく、路傍の崖につき出たせり科の梢に、中形の腹柄の長い銀口がしきりに来るとは、狩猟をやっているのが、眼にとまった唯一のギングチであったが、これは何ともならなかった。崖の内側の高い梢には、ときどきプセンバチがやって来たので、田塾君のと網の柄をつなぎ合せ、更に蜂がくるたびに飛び上がっては採集した。逃したことが多かったが、それでも頑張ったおかげで、2人で♀も含めて15, 6頭とった。♀はカオキンプセンに似ていたが、♂は中脚が正常な、別の種類だった。この2種以外では阿里山駅の下の方の原でヨモギの葉の甘露へ来るシロウズジガバチモドキ相当数をとったのと、また珍しくもイスカバチが1頭とれたのが、アナバチ科のほとんどすべてだった。

阿里山では大形の蝶は少なく、よく眼について印象に残ったのはシロチョウに似たウスアオゴマダラシジミだけであった。もっとも、他の大形種は無関心だったためかも知れない。翠峯ではオオベニモンアゲハがよく眼についた。阿里山は、その巨大さで知られるテナガコガネの産地である。私たちも一応頭においてい

たが、直接採集することはできなかった。しかし町の床屋さんで、遊ばせていたものを田塾君がもらいうけた。この甲虫は夜間灯火に飛行することがよくあるという話だった。

阿里山中腹の奮起湖は、なかなかの好採集地だった。阿里山鉄道の人々の好意で、宿舎にも便宜を与えられ、7月の末の4、5日をここで過ごしたが、アリマキの大量についた笹株を幾つか見つけたため、毎日そこへ出かけて、リュウキュウアナバチの早合、数種のギングチバチ (*Ectemnius*, *Crossocerus*, *Rhopalum*), *carbonaria* に似た新種の *Larra* の1群、珍品のジガバチモドキ (*T. fenchihuense* sp. nov.), ベッコウバチ多種、ツチバチ、コガネバチその他いろいろなものをたくさんとった。奮起湖付近はいわゆる万年瓜の多産地で、無数に流れる溪流の上に針釘で柵をつり、ここへつるをはわせて瓜を栽培するのである。この瓜柵にシロズゴコロギバチ (*Liris surusumi* = *L. shirozui*) がよく来たが、場所の関係で採集がむずかしく、とれたのは数頭であった。奮起湖部落を出はざれた所の崖に大きなノブドウの株が1つあり、そこに多数の蜂が群れているのが下から良く見え、中にはアナバチやハヤバチなどもいることがよくわかるのだが、高すぎて何ともならず、実に残念であった。あそこへ網がとどいたなら、奮起湖の蜂のリストだけでなく、台湾の蜂のリストに何種か加わるものがおったに違いないような気がするのである。同地では他にはノブドウは1株も見かけなかったから、これは釣り落した魚が大きいたとえには当たらぬ場合と思う。

なお奮起湖という地名は地形にもとづくもので、そこには湖などは何にもない。これは私たちが驚かされたのであるが、奮起湖駅長の陳さんの説明によると、奮起とは台湾人が天秤棒の両端へよく釣り下げる、一方にはけ口のついたざるのことであるが、同地の地形がそれに似ているところから、奮起に似た凹地という意味でつけられたのだということである。その何十戸かの家は奮起の急斜面部にゴチャゴチャとたてられ、道路は横走するもの以外はみな坂道で、石段か石だたみになっている。その斜面を瓜をいっばいつめた籠をかついて登ってくる人を見ると、瓜の生産には大変な労力があることがわかる。

恒 春

南端近くの恒春に8月の初め10日ばかり滞在して、付近を採集しまわった。近くの小川の、曲り角に堆積した砂地を次々と漁って、大量のスナハキバチ (*B. hungaricus*) を採集した。日本のものと同種だが、黄斑が多い。2人で200頭以上採ったのは(まだいくらでも採れた)、私の前の報告に引続く変異研究をするためである。ここにはトゲムネバチの2種(1種は *O. arabus* の亜種、1種は多分 *O. bicolorisquama* Str.) や、*Nysson* sp. *Lyroda* n. sp. などもあり、またタイワンジガバチが盛んに造巢し、キゴシジガバチ・タイワンルジガバチ・チビアシナガチも多かった。その他に砂地のベッコウバチや小形のリリース。恒春付近にはキイロアナバチ *S. sericeus lineolus* が多く、早は人家へ入って来て、台所や縁下の土間に巣をつくっていた。

青蜂も非常に多く、四重溪の人家(一般人は谷へはいれない)や満州(地名)の農家ではたくさんの個体を採集した。多いのは大形のムツバセイボウ (*C. principalis*)、ミドリセイボウ (*C. lusca*)、クロバネセイボウ (*C. fuscipennis*) でその他数種のヨツバ、ミツバ、ハナシなどの青蜂がいる。

南端のがらんびは観光地だが、みるものは何もないといってよい。灯台も見ものの中には入るまい。ここではキガラツチバチの合だけをたくさんとった。バス停を1つ2つもどった付近の海岸の砂地はなかなかの採集地で、タイワンハナダカバチ・スナハキバチがあり、田塾君がひとりで行ったときにはトゲムネバチや *Nysson* をたくさんとって来た。人家には相変らず青蜂が多く、キガラツチバチもかなりおり、とくにヨツボシツチバチは無数にいて、夕方近くなると何かの枝にゴチャゴチャ群れ止まる様は壮観であった。

海岸は隆起さんご礁で、そこを洗う水は清く、きれいなペラ科の小魚が群れ、私たちはいつもそんな所で涼しい海風に吹かれながら、弁当のパンをたべ、黄瓜でのをうるおしたものである。何しろ、その頃は毎日気温は36°を越し、いくら頭張る2人でも、一度木陰で一息入れると、そこを立去るには少なからず努力を要したほどであった。

恒春からバスは毎日懇丁公園へ何往復かしている。ここは以前のクアル(クラル)で、熱帯植物園として

著名な所であるが、その背後の隆起さんご礁の上に発達した熱帯自然林は、その地形の奇異奇怪に加えて、気根の無数に垂れ下がる巨木を配し、すばらしい景観を呈しており、観光客も実に多い。

この公園は戦前岩田久二雄博士が蜂研究の根拠地とした所であるが、今もなかなか蜂は多い。入口の植物園の中では巨大なトビロアシナガバチが割と目につく。この有名な蜂は台湾でも決して多くないようであるが、ここではよく眼についた。また少し入った所で少し変わったスナハキバチを取ったが数は少ない。奥の地形錯雑した中央に観日峯というさんご礁の小高い峯があるが、ここは蜂や蝶の集合地・通路となっているらしく、私は何日かここへ行って相当数のオオセイボウ・クロドロバチ (*Montezumia indica*)・ソナンアナバチ・ハキリバチ数種やツチバチ類・ハヤバチ類などをとった。また採集ついでにときどき飛来するツマベニチョウやオオゴマダラ・マダラチョウ類のきれいどころなども網に入れた。更に奥へ入ると道は迷路のようになっていたが、ときどき枯木があり、その1本の有望そうな所でクニオギングチ (*Piyuma prosopoides* = *Crossocerus iwatai*) をとらんものと頑張ってみたが、このハチはついに姿をみせず、代りに同属の近縁種数頭をとった。クニオギングチの学名は一応 Leclercq の見解にしたがっているのだが、私は少し疑問をもっており、今度の採集品を後で調べることを楽しみにしているわけである。なおここでは *Isodontia* の珍品やドロバチの珍品もとれた。付近の路上でツチスガリの初めての種をとり、また台湾でのただ一度のチャンスだったキシタアゲハとも出会った。キシタアゲハの売品は現在ほとんど飼育品だということである。

東 海 岸

東海岸では知本・台東・初鹿・稲葉・花蓮・宜蘭県の粗坑と埧頭を採集した。花蓮では鯉魚潭と天祥へ行った。この中で最もだめだったのは名所天祥で、風景は奇観であったけれども、蜂はさっぱりで、*Stigmus* 少し、*Liris* 少し、その他ハキリバチなどの蜜蜂若干というところだった。他はそれぞれ特徴があり、知本の谷道ではスナハキバチ・ジガバチモドキ(数種多数)・アナバチ類 (*viduatus* と *sericeus*)・タイワンツチスガリ・モンキジガバチ・その他花蜂多種がとれた。台東海岸では小形のハナダカバチ(台湾未記録)・スナハキバチ・小形のツチバチを中心として新種の *Liris* やツチスガリ・トゲムネバチなどがとれた。とくに珍品のハナダカは群棲地を発見したので数十頭を得た。巣も見つけたが、まだ掘りかけたばかりであった。このハナダカは東岸には各所にいるらしく稲葉の河原でも少し取れた。この河原は広く歩きまわるともりで出かけたのだが、傘をさしても反射が強く、主として端の方の草の生えたところと、少し入った所の砂中の耕地を調べただけであった。ここにはスナハキとツチスガリ、小形の *Liris* が割に多かった。初鹿は案外おもしろい所でノブドウが所々にあり、そこでソナンアナバチ・コクロアナバチ・多数のタイワンハヤバチをはじめ、大形の *Dasypoctus* (小形のもの *D. seylonicus* はどこにもいる) 属のギングチをかなりとった。これは農家の柱に造巣しているのを田塾君がみつけ、帰巣するところを片端から獲物もろとも採ったわけだが、場所の関係上は1頭も得られなかった。少し山を登った路上で、清水が道へ溢れ出している所では多数のジガバチモドキ・モンキジガバチ・アシナガバチ類・ドロバチ類がとれた。このあたり、どこでも青蜂はいくらでも取れた。

東岸で最もすばらしかったのは鯉魚潭と粗坑だった。前者の小さな湖の岸の砂地ではオオイスタデの群落があり、そこへ多種の蜂が飛来し、下の砂上には *Liris* の小形種やトゲムネバチが活動し、またスナハキバチはわんざとおった。花に来る方は数種のツチスガリ・アマミアナバチ (*S. viduatus*) ツチバチ類の数種が主で、そばのイモを刈りとった後の畑には、キンイロコロギバチ、とくにその舌が実に多数おり、私は50頭とった後田塾君を呼んで更に50頭ほど捕えたほどだった。この畑には台湾の各地に多いタイワンオオコロギの穴がたくさんあったが、あの巨大なコロギは、あの蜂の餌にはなるまい。

粗坑では数軒ならんだ農家の庭先に一列の例のタイワンレンギョウがあり、この花に多数の *Anthophola* spp. が群れ、それに混ってオオセイボウ・ハラナガスズバチ・イワタギングチ近縁種・スナハキバチ・ハヤバチ・アオスジハナバチ類・ハキリバチ類が多かった。なお路傍の生垣にビンボウカズラやノブドウがからまり、ここもアナバチ類・ハヤバチ類・キゴンジガバチ・スナハキバチ・コロギバチ類・アシナガバチ類

・ベッコウバチ類の天下だった。農家自身にはセナガアナバチが多く、またセイボウやタイワンクマバチが多数おった。また1つの田圃の畔に1列に生えていたモロコシは更にすばらしく、多種のケラトリバチ (3種)、コオロギバチ類・スナハキバチ・キングチバチ・ジガバチモドキ・ベッコウバチ (とくにハグロアカアシベッコウ)・アシナガバチ類・タテハモドキが実にたくさんいて、それも採っても採っても後から集まってきた。この部落でも子供達 (大人も何人かいた) は蝶の採集人になっていたが、蝶とりをやめて私たちに協力し、いろいろな蜂をとってくれた。しかし、刺す種でもお構いなしに網の上から抑えてかけてくるのには、こちらの方が冷汗を流した。蝶は普通のものが1頭5銭か10銭 (日本の45銭・90銭)、ツマベニのように少ないもので50銭 (4円50銭) だそうである。もっとも台湾は物価が安いから、5銭の蝶でも完全品を100取れば、結構1日のかせぎにはなるわけである。ただし傷ものは売れないから、少しでも傷んでおれば、ルリモン・ベニモン・オオゴマダラ・ツマベニなどでも、惜しげもなく捨ててしまう。私が教室の学生達にお土産をもって来た約300頭ほどの蝶の中には、そういうのを拾い上げたもののがかなりあるはずである。

追記および感想

西部の好採集地の中で、採集談を割愛した場所に阿里山ふもとの竹崎と台南県の関子嶺があり、なお他にも私の行った所は何か所かある (たとえば水裏・日月潭・枋寮等)。これらの中で竹崎はとくにおもしろく、宿の主人の持ち山のバナナ山には、バナナとパイナップルの過重な接待の上にすばらしい蜂の饗宴場があり、ここでは *Dolichurus・Trilogma* などのセナガアナバチ類など珍しいものがとれ、また川辺の砂地で田塾君は *Methoca* の舎をたくさんとった。この地は蜂の採集者は見逃すことのできない場所である。

台湾を2か月がかりでひと周りにして、蜂について感じたことを列記してみると、

1) 熱帯地方には種数は多いが個体数は少ない、ということが一般に言われているが、台湾は熱帯に近いけれども、この言葉は当たらない。

2) ただし、場所によっては、意外に少なく、ときには全く姿をみせず、私の多年の野外経験に照して不思議に思われるほどであったが、これは恐らく徹底的な害虫駆除 (飛機による薬剤散布) の影響だと思う。現在の台湾はこのため蠅も蚊も非常に少なく、マラリアはほとんど絶滅している。

3) 北と南で fauna に相当な違いがあるようだ。南だけにしかいないものもかなりあるようだ。ようだ、というわけは、私たちの採集は季節的にも数量的にも限られていて、あれくらいのこと台湾の蜂相が十分にわかるはずがないからである。事実、次のようなことがある。私たちが7月楊梅に行ったときには、そこには普通のルリジガばかりで、タイワンルリジガは1頭も見かけず、同様北・中部ではどこでも後者を見かけなかった。枋寮で初めてこれを見つけ、それ以後南部ではこの種ばかりで前者はほとんどとれなかった。東海岸を北上するにつれて後者は次第に姿を消し、前者とすっかり入れ代った。それで私はタイワンルリシガ (*S. bengalense*) は南部に限られるものと推察したものだが、帰ってから後で張保信さんが送ってくれた多数の蜂の中に、楊梅およびその付近で8月~9月にとったこの種が少なからず入っており、逆に普通のルリジガは1頭もないのに、私は啞然としたものである。だが、そういう点に配慮しても、なおかつ南北の違いは感ぜられるのである。

4) 同様のことは中央山脈で距てられた西部と東部についても言えそうである。この場合、南部は東部と共通するらしい。(台湾山脈は南端まで行っていない)。

5) この東西の差違は、メルル線と関係があるのではないか。

* * *

台湾は日本と比べて物価が安く、果物が多く、主食は米で、台湾人は親切である。中年以上の人たちは日本語を話すし、治安はよく保たれ、日本などと比べて盗賊は少ない。暑さも日本の真夏と比べれば大した違いはない。バスはよく発達し、車内でみる公德心など、日本で亡びてしまった美風が台湾で大事に保たれているような気がして、私などは一種の郷愁に似たものを感じたほどである。本篇は採集記であるから、観光に関することを避けたが、馬鹿さわぎの好きな人は別として、庶民階級の人、つましく旅行をしてみたい人は、ハワイなどへ行くよりは台湾へ行くことを大いに推奨する次第である。